

関西支部勉強会レポート

第19回関西支部勉強会

疾患研究に、誰の視点をどう取り込むか？ -英国の取り組み事例とその背景-

日時 2012年5月7日（金）18：00～20：00

場所 京都大学 吉田泉殿

ゲスト 東島 仁 氏（日本学術振興会特別研究員（大阪大学））

人数 11名

今日もそれぞれ多様な（バラバラな）興味をもった参加者が、この勉強会に集っていました。

参加者自己紹介の後は、東島さんのお話がスタートです。

*お話の流れに関しては、「プレゼンの流れ」をご覧ください。

1. イギリスにて

2011年10月末から4ヶ月間、英国議会科学技術局に滞在。

英国議会科学技術局は、英国議会議員にバランスの取れた科学技術情報（多様な関係者への調査を元にした）や助言を提供する機関。

英国国内の若手研究者のインターンシップ（審査あり）を受け入れることによる人材育成機能も重ね持つ。

2. 「市民の視点が生命医科学にとって大切だ」となっている経緯

イギリスで「市民の視点が生命医科学にとって大切だ」となってきたのには、いろいろな経緯が。

- ・ 科学技術の影響力の深化と増大への認識の深まり
 - ・ 研究者不信
 - ・ 医療制度の問題点
 - ・ 民主主義
- （・「アメリカでもやってるし～」的な感じ、も??）

研究者の側の「市民の視点が生命医科学にとって大切だ」には4つほど水準。

- ・ 研究の必要性、方向性の正当化

関西支部勉強会レポート

- ・研究から生じる課題の検討と、可能な限り早期の対応
- ・研究に視点を組み込むことによる、結果の有益度UP
- ・説明責任、PR

3. 今日の発表の前提

前提1：どのレベルの関係か

政策レベル>研究領域レベル>プロジェクト、研究者集団レベル>個人研究者レベル

今回の発表は、「プロジェクト、研究者集団レベル」

前提2：イギリスのしくみ

各研究・技術領域：市民やステークホルダー、関連研究者など多様な人の意見を聞く

→Agendaをつくる

→政策や研究領域の動向に影響する。社会貢献度を上げるべく動いている。

4. チャリティー、トラストなどの団体の活動が活発

医学領域のチャリティー団体連合のようなものもある

amrc

→<http://www.amrc.org.uk/home/>

団体に共通して必要な活動、集団で動く方が能率的な活動などを行っている。

シンクタンク的な働きも。

研究者の情報発信をより当事者に届きやすいようにする活動も。

例 Patients Participate!

→http://www.amrc.org.uk/our-members_patients-participate

チャリティー、トラストなどの団体が、多くの研究費を出しているし、研究者育成に力を注いでいる。

応用研究や実務者の情報共有に特化したジャーナルを出して、その分野の活性化に貢献。

関西支部勉強会レポート

4. 研究に当事者視点を組み込む仕組み

Service User Researcherという立場がある。

当事者として研究している人のこと。でも、アカデミックポジションにはほとんどいない。色々な障壁。

User Groupというしくみがある。

User InvolvementやUser Participationをサポート

研究者主導型の方がうまくいく（印象）

メンバーは数十人の患者さん

月に1-2回、お茶をしながら会合を持つ

患者さんにとっては、研究に対して意見が言える、同じような立場の人と出会うことができるなどの利点。

研究者にとっては、研究に対して、意見がもらえる利点。

これがあると、倫理審査やグラントの申請がスムーズにいったりする。

当事者の巻き込み方

Consultation：一番多い

Collaboration：Consultationよりもう少し踏み込んだ感じ

User Led / Controlled：当事者にも、研究者にも負担大。なかなかうまくいきづらい。

研究活動への当事者の巻き込みがうまく行っているところは・・・

- ・双方の負担が少ない。
- ・サポートがしっかりしていて、サポートの母体が安定している。
- ・強いリーダーシップがある。
- ・もともと信頼関係がある。

という特徴があるかも。

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第19回勉強会・運営担当 水町 衣里（京都大学）、加納 圭（滋賀大学）